



Title	よそ者と地域づくりにおけるその役割にかんする研究
Author(s)	敷田, 麻実
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 9, 79-100
Issue Date	2009-09-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/39351
Type	bulletin (article)
File Information	JIMCTS9_006.pdf



[Instructions for use](#)

よそ者と地域づくりにおける その役割にかんする研究

敷田麻実

The Role of Outsiders in the Community Development Process

SHIKIDA Asami

abstract

Community development, one of critical elements of the sustainable community management, has been increasing its importance in local communities in Japan in recent years. A gradual shift toward decentralization, since in 2003, has been forcing communities to adopt more self-sustaining development policies. At the same time, along with the enactment of the NPO Act in 1998, a variety of actors, including those outside from the communities, have entered grass-rooted activities in local communities. Such an increased involvement of outsiders in the community development process means that they also play an ever-more significant role in the empowerment of the local community. Although most articles discuss the controversial points of outsiders, there have been only a few studies evaluating the positive perspectives. This paper examines the role of outsiders in the community development process by discussing the relations between the working process and outsiders. The result of this study implies that more openly the community is managed, more significantly outsiders can contribute to the community development.

1 はじめに

高度経済成長を経た日本は、1970年代に経済的な豊かさに恵まれた。しかし1980年代から状況は徐々に変化し、国債残高の増加による財政硬直と新自由主義による「小さな政府」の追求、それに続く構造改革と地方分権改革が国内の経済と社会を改変してきた。それは2000年以降に進められた全国的な市町村合併を経て、自治能力の向上による地方自治体の「自立的な運営」の要求につながった（佐々木、2004）。

ところが国の財政再建を優先した結果、地方自治体は「三位一体改革」によって、十分な税源がないまま自立路線を進めなければならなかった（伊集院ほか、2006）。同時に、それまで地域経済を支えてきた公共事業の規模が縮小したため、地域経済は構造変化を迫られ、財政危機に陥る自治体も出てきている（金子ほか、2008）。悪化した財政状況の中で、自立と地域経済の活性化を求められた自治体には、大規模公共事業の失敗やリゾート開発の破綻、国主導の地域振興策の陳腐化から、既存のアプローチではない新たな地域振興が必要だった。

その結果注目されてきたのが、自治体による地域活性化ではない、「地域づくり」と呼ばれる多様な地域の関係者がかかわる地域活性化である。従来も地域づくりは各地で進められてきたが、国の制度や主導の下、地方自治体や商工会などの組織が地域づくりを進めることが多かった。しかし最近の地域づくりでは、地域住民の参加と地域主導という2つの特徴を見い出すことができる。特に地域住民の地域づくりへの参加では、従来の行政主導の地域活性化を変化させる効果も期待されている。さらに住民以外にも、外部者いわゆる「よそ者」の地域づくりへの関与も最近注目されている¹。

よそ者とは、自分たちとは異質な存在と認識され、「よそ者（余所者）」や「旅の人」または「風の人」など、主に地域外から来る人びとを指している。しかし、地域づくりの現場で、どうしてよそ者が積極的に評価されるのか、また地域づくりによそ者が寄与できる理由は何なのかなど、地域づくりにおける「よそ者効果」やそのメカニズムは明らかにされていない。そのため、素朴な「よそ者信仰」が地域づくりの現場で喧伝されることも多く、よそ者に過度に依存するなどの誤った選択が行われることも多い。

しかし、こうした流布や多用にもかかわらず、地域づくりと関連してよそ者を分析した研究はほとんどない。例外的に、鬼頭（1996）や敷田（2005c）、松村（2004）などがあるが、他の研究では、ほとんどが地域づくりによそ者が貢献していることの実態の報告、あるいはその「成果」について言及しているだけである。小松（1995）は、山口昌男（山口、1974）の優れた分析を評価し、それに続くテーマは、社会でよそ者（小松は「異人」と表現）がどう扱われてきたかということだと述べている。この点か

▶1 『町づくりは「よそ者」に任せよ』（2009年5月18日付け日本経済新聞）で大竹文雄氏が主張するように、地域づくりでよそ者に対する期待は大きい。

- ▶2 地域は都市部・非都市部を問わずに存在するが、本稿では主に大都市圏以外の「地方」の地域を念頭に置いて論じた。その理由は、地域づくりが、繁栄する都市部に対する地方の市町村の活性化や再生を前提とする場合が多いからである。ただし、これは本稿の分析を都市部の地域づくりに適用できないという断りではない。
- ▶3 地域の範囲については、日常生活圏の範囲に近い区域と想定するが、地域は多義性を持っているので、文脈によって拡大縮小するという森岡（2008）の主張に従って、厳密に範囲を特定せず用いた。
- ▶4 特定非営利活動促進法（1998年施行、いわゆるNPO法）の第2条ではNPO活動の内容について定め、その中で、「第3号 まちづくりの推進を図る活動」としている。
- ▶5 中でも赤坂憲雄は『異人論序説（1992年）』、『排除の現象学（1995年）』および『境界の発生（2002年）』で繰り返しよそ者について論じている。参考文献を参照のこと。
- ▶6 典型的な例として、支配者の行為を理想化するために、自分より劣る他者（よそ者）をつくり出してきた植民地の事例を本稿（2005）が紹介している。ここでは、優れた支配者と劣ったよそ者という関係が設定されていた。
- ▶7 本稿では、よそ者を含む地域内外の関係者を「アクター」として表現した。また地域内のそれを「地域アクター」地域外を「地域外アクター」とした。

らも、地域社会とよそ者の関係は、重要な研究テーマであると考えられる。

そこで本稿では、従来の一般的な「よそ者論」ではない、地域づくりにおけるよそ者の存在とその特性について考察することを試みた。そしてよそ者が持つ「効果」を積極的に評価し、地域がよそ者との関係性を維持しながら相互変容するプロセスをほんらいの地域づくりであるとしたうえで、観光や交流について言及しながら、よそ者の役割について考察した。

なお、地域づくりの中で一般に使われるさまざまな外部者は、「よそ者」に統一して標記した。また本稿で「地域」とは、一定の地理的範囲とそこに住む住民やその関係性を表す²。これは社会学で用いられる「地域社会」や「地域コミュニティ」とほぼ同じ意味である³。また、地域振興や地域活性化、地域再生を総括して「地域づくり」とした。最近では地域づくりよりも「まちづくり」⁴が一般的によく使われるようになっているので、地域づくりをまちづくりとして本稿を理解してもかまわない。

2 よそ者とは何か

2-1 よそ者の存在

最初に、よそ者について考察するために、よそ者の定義や特性に言及したい。よそ者自体にかんしては、道化やトリックスターとして論じた優れた先行研究があり（例えば山口、1974；山口、2003；赤坂、1992など）、関連する研究を鳥瞰することができる⁵。赤坂の議論は、民俗学分野に限らず、よそ者や排除の概念を用いて、学校現場でのいじめなど、現代の社会現象も考察している。

一方、社会学でも「他者」の存在は重要なテーマであり、以前から好んで論じられてきた。例えばベッカー（1993）による「アウトサイダー」の研究では、それまでの病理学的、否定的研究視点を批判し、アウトサイダーの「逸脱」を積極的に評価した。またハーバーマス（2004）が、他者の受容にかんして「差違に敏感な包括」という概念を示したり、大澤（1994）が他者が他者たる特性について論じたりもしている。最近では親密性の視点で他者を分類した金（2008）や、差違の視点で他者について言及している山下（2008）の論述などがある。

しかし、こうした研究者によるよそ者の考察とは異なり、地域振興の現場である日常の地域で使われる「よそ者」は、地域外から地域にきた地域住民以外の人や、身内ではない他者の一般的総称であり、それを評価したり、また好意的に捉えたりすることは少ない。むしろ、よそ者という言葉に批判的意味を込めて使用されることが多かった⁶。

しかし最近の地域づくりで一般的に使われている「よそ者、ばか者、若者」のように、もっぱら肯定的な意味を持つよそ者も存在する。この場合のよそ者は、地域アクター⁷が持たない優れた点を持つことで評価されて

いる。本稿では肯定的によそ者を考察するが、このようなよそ者への評価は、よそ者が持つ「他者のまなざし」に負うところが大きい。この他者のまなざしとは、地域内の人びととは違う視点でものを考えることである(菊地、2002)。地域アクターは、地域に長く居住すると「日常性に埋もれて」地域のことを当たり前と思いこみがちだが、よそ者はそれを無視したり、否定したりして、いわば新鮮な感覚をもたらす。地域アクターが絶対だと思いこんでいたことも、よそ者の行動を見て、そうでないと気づくことが多い。つまり「裸の王様」を指摘した子供たちのように、よそ者の視点が地域の常識について再考する機会をつくり出す。

この点については、筑紫哲也が梁石日との対談の中で意見を述べている。梁・筑紫(2003)は、「日本社会は別の場所から見るとこう見える」と気づかせる役割を在日外国人が持っている」と指摘し、異分子であるよそ者の良さを積極的に評価している。こうした存在を、山口(1974)は「トリックスター」とも呼んだ。ラディンら(1974)は、トリックスターがいたずら者・ペテン師と呼ばれることもある、ある意味で「普遍的な存在」としたうえで、それを「創造者であり破壊者」になる「矛盾した存在」だと述べている。ハイド(2005)もまた、トリックスターは超越する者であり、「創造力を持つ白痴」また「賢明なる愚者」だとも述べている。トリックスターは道化とも呼ばれ、道化が主人公になった作品の例としてセルバンテスの『ドンキホーテ』がある⁸。山口(2003)はよそ者である道化にかんして、一般に意味があると信じられている行為を道化が滑稽に演ずることで「意味性」を抜き取って本質をむき出しにする役割を持つと述べている。

また、この概念の現代ビジネスへの応用を試みた中西(2001)は、それを「ビジネストリックスター」と名付けている。いずれにしてもトリックスターは、常識から逸脱した存在だとされている。

前述したベッカー(1993)は逸脱者としての「アウトサイダー」を考察し、マリファナ使用者の社会学的な分析から逸脱の研究を進めた。そして、それまでの病理学的研究視点を批判し、逸脱には学習が必要だと論じた。彼はアウトサイダーを「集団によって一方的につくられた規則に従って生きることができない人」と定義している。逆にアウトサイダー側から見れば、規則をつくった「一般人」こそ逸脱していることになる。また中西(2001)は、共同体の外部から来訪する者を「ストレンジャー」と呼び、その例として旅の商人や芸人をあげている。中西によれば、彼らは共同体にコトやモノを持ち込み一定期間滞在して離脱して行く存在である。

民俗学では、小松(1995)がよそ者を「異人」と位置づけ、折口信夫の「まれびと考」を紹介している。しかし折口が示したモデルに小松は満足せず、新たな概念創出を期待すると述べている。まれびとにかんしては赤坂(2002)も言及し、秩序と混乱、中心と辺縁を往来する存在だと論じている。赤坂によれば、よそ者は共同体以外から遣わされた存在であり、また逆に共同体から疎外された者でもある。そして、この共同体と異人の関係にかんしては、「媒介」という中間の存在を設定して整理している。さらに、共同体の祭りは、こうした来訪と追放を司る媒介になると主張してい

▶8 こうしたトリックスターの例は近代に限らず、ギリシャ神話に既に見出すことができる(ケレーニイ、1974)。また、文学作品にかんしてのよそ者の記述は、高橋(1977)が『道化の文学 ルネサンスの栄光』で取り上げている。高橋は英語の fool の意味を持つ道化に注目し、「多義的」な道化の存在を指摘した。そして道化は社会的な寛容の中で存在できると主張している。

る。さらに赤坂（1995）は、山田洋次監督の映画『フーテンの寅次郎』の寅次郎を「植物的異人」だと考察している。植物的かどうかは別として、共同体である下町の人々は、よそ者である寅次郎を受容したり排除したりする。

その他には、前述した山口（2000）が「ノマド」または「ノマディックな存在」を論じている。山口はシェレールの著作『ノマドのユートピア』を紹介し、ノマド的な生き方に賛同している。シェレール（1998）によれば、ノマド的な生き方とは「移動」を伴う生き方である。ノマドとは遊牧民を表す伝語で、移動性を備え、タテ社会ではなじみにくく、ヨコ組織間を移動する。山口にとって、常に漂泊・移動する存在はノマドであり「クレオール主義」であった⁹。このような移動を続ける存在としてのよそ者について中沢（1994）は、放浪生活者を示す「ポヘミアン」というチェコ語を紹介している。中沢は彼らを「歴史の外部に生きようとする人」だと呼んでいる。

以上のように、よそ者と呼ばれる人びとは、地域づくりで注目される以前から、さまざまな分野の研究者や論者が注目してきた概念である。よそ者が登場する場によってさまざまな名が冠されてきたが、そこに共通するのは、移動や漂泊することであり、主に外部から内部に入って認識される存在である。地域の日常生活でも、よそ者は地域外から来訪して地域に滞在する存在を一般的に表している。内部は地域という空間で、外部は地域外という限定はあるが、外部の存在が移動・漂泊し内部とかわるという、よそ者にかんする論者たちの認識と一致する。そこで次に、こうしたよそ者の持つ特性について議論したい。

2-2 よそ者の持つ特性

よそ者は、バガボンダやアウトサイダー、風の人、まれびとなど多様な名称によって表現されてきた。よそ者は、特別な存在のように感じられるが、むしろよそ者以外の「内部者」にとって必要な存在だからこそ頻繁に使用され、また好奇心の対象ともなるのではないか。では、多様な名前と呼ばれるよそ者が持つ特性は何であろうか。

敷田（2005c）はこの点について、よそ者とは同じ地域や空間内部にいる「関係者ではない異質な存在」だと述べている。ここで異質な存在であることは、同質か異質かという二者択一ではなく、そこに段階がある。その段階とは、モーフィング¹⁰のように連続的な変化を示すことである。それを本稿ではよそ者の持つ「他者性」の変化だと考える。他者性を過剰に示すことで、内部で通用する常識がすべてではないということをよそ者は示す。また逆に他者性を下げれば、内部と融和する。

しかし、よそ者にとって他者性は、自己主張であるとも考えられる。それは、内部との距離の確認行為であり、他者性の主張はよそ者の「存在の証し」として重要である。そのためによそ者は、地域や組織内部の常識やルールから逸脱し、「超える部分」を表現しようとする。もともと、一方的によそ者がよそ者性を表現するのではなく、あくまでもそれを認識する周

▶9 クレオールという語は多義性が高いが、遠藤ほか（2002）によれば、16世紀に使い始められた中南米やカリブ海の植民地生まれのヨーロッパ人を指す言葉である。

▶10 モーフィングとは、皿からコップに形を変化させるように、連続的に形態を変化させる技術をいう。その途中の過程は、両者の中間の形態だが、たとえその状態でも、それが皿であるかコップであるかは判断できる。

囲（内部）との関係でそれは決まる。例えば、前述したベッカー（1993）は、逸脱行為の有無と社会によるその認識の有無によって逸脱を4分類した。その分類によれば、社会から認識された明確な逸脱行為以外にも、隠蔽された逸脱行為や誤って逸脱と認識される行為も存在する。この点からは、よそ者が単独でよそ者となるのではないことがわかる。

これに関連して赤坂（1992）は、よそ者は「関係概念」だと主張している。つまりよそ者の存在だけでよそ者となるのではなく、よそ者と内部アクターとの関係でよそ者の存在が決まるということである。言い換えれば、よそ者をよそ者たりえる存在にしているのは、よそ者でも地域側でもなく、その両者の関係である。また、他者とのコミュニケーション、他者の存在で自己が形成されるという主張は多くなされており（内山、2009；林、2005など多数）、それを応用すれば、内部にいるアクターの存在もよそ者との関係で決まると考えることができる。

一方、赤坂（1992）も、よそ者について論じ¹¹、よそ者とは「現在はある場所に留まっているが、漂泊の自由を放棄していない存在」だと述べている。そしてよそ者を、漂泊民、来訪者、移住者、マージナルマン、帰郷者、バルバロスの6つに分類した。また、よそ者が内部と外部の境界に存在する、空間的には漂泊と定住の中間を生きる「両義的な存在」だと述べている¹²。両義的な存在とは矛盾する2つの概念を包括できることであり、よそ者は異なる2つのことを理解できる存在である。この点は赤坂（1995）でさらに整理され、よそ者とは「異界に向かって開かれた窓」であり、その存在がなければ、内部（地域）がむき出しで外部にさらされてしまうと主張している。窓は内部から外を見るツールだが、ある意味では媒介装置であり、よそ者は前述した媒介の役割を果たしていると考えられる。

また赤坂（1992）は、よそ者が「ある種のズレた雰囲気を漂わす」存在であることも認めている。このズレは前述した他者性であろう。ズレが少なければ身近な存在であり、大きければよそ者たるよそ者になる。ズレを持つよそ者の例として、外務大臣だった田中真紀子を評価した矢野（2002）の「田中真紀子トリックスター論」がある。矢野は田中真紀子というよそ者が存在してはじめて、外務省の「常識離れた特異な体質」が明らかにされたと主張する。

またこれを地域で考えると、よそ者の持つズレは地域という「システム」からの「変位」である。この場合のシステムとは、今田（2005）が述べるように「要素の集合間関係でできている全体」である¹³。つまり地域社会である。この点からは、ある意味を持つ「境界」によって地域外という空間から区分された地域というシステムを想定し、そこから乖離している存在がよそ者である。

ただし、システムの境界は境界の両側にいるアクターによって決められるのであって、一方的に決まるのではない。もちろん開拓地のように、外部を無視して一方的に境界を引くことはできるが、一般的には境界画定作業は、それぞれの側が関係を吟味して進められる（平川、1999）。この点では、内部アクターとよそ者の「関係性」によって、境界が決定されると

▶11 赤坂憲雄は前出の小松和彦と同じく、よそ者を「異人」として表現している。

▶12 両義的な存在とは、「公然の秘密」のように撞着（英語では Oxymoron）なことである。

▶13 システムについての言及は多いが、わかりやすい定義として、今田の他にも、「システムとはある意味を持って環境から区別された範囲」だと述べている鈴木（2002）を紹介する。

考えた方が良いだろう。

さらにこの境界について考えると、地域は空間の概念を持っているので、地理的な境界をまず想定できる。しかし地理的な境界だけがすべてではない。そこには「見えない境界」もあり得る。境界を越える行為、越境にかんする民俗に注目した篠原（2003）は、越境が「見えない境界」を越えることも含むと述べている。そして、国境や領域などを越える際に規範や伝統などの「不可視なもの」を横断する例をあげている。つまり、境界という差違を生じさせる要素は空間だけではなく、一定の視点や基準も含まれる。この点でよそ者は、内外の地理的境界を越えるだけではなく、見えない境界を「越境」する存在でもある。そしてその越境が、よそ者がとる突飛な行動や、非常識な行為になる。よそ者側も、よそ者であるために彼我の差をことさら強調する。つまり他者性を強調することにもなる。

ただし、ここで確認しておかなければならない重要な点は、よそ者として認識された時には、既によそ者は地域とかかわりを持つ、ある意味で地域内のアクターとなっている点である。逆に、よそ者と認識されない、地域にとって何の利害もない存在は、そもそもよそ者として認識する必要もない存在である。

これにかんして赤坂（1992）は、前述した分類とは別に、地域におけるよそ者を大きく3つに分けている。赤坂の分類は、生産活動への関与を基準としており、①地域の宿泊施設に滞在するが通過するだけの行商人・観光客など、②教員・改良普及員など仕事のために一時的に居住する者、③共同体の生産活動に参加する移住者である。これはよそ者をできるだけ「広義で解釈した分類」である。

赤坂の分類を厳密に考えれば、一般に「観光客」をよそ者とは呼ばない。観光客は地域を通過して行くことが前提で、経済的利益や影響はあるが、通常は地域の仕組みや利害関係に多大な影響を与えないからだ。このような存在をよそ者とはしないだろう。しかし、観光客も滞在が長くなり、地域に影響を与える存在になると、例えば「よそ者は厄介だ」というように扱われることとなる。よそ者の異質性は地域の内部と外部の差だけではなく、時間や関与度合いによって生ずるということだ。

3 | 地域づくりとよそ者効果

3-1 よそ者効果

地域づくりの現場では、半ば信仰のように「よそ者・ばか者・若者」という3者の役割が強調され、また研究者や論者も少なからずこの表現を用いている（三藤、2006など多数）。中でも「よそ者」は数多く引用され、地域外から来たよそ者が地域づくりで活躍することが好意的に紹介されていることが多い。例えば、関（2000）は、よそ者である営林署職員が地元

住民と協働して成果をあげた北海道の「えりも緑化事業」の例を評価している。またさらに積極的によそ者の必要性を強調する主張もある。例えば増田（1999）は、疲弊した農村の再生にはよそ者の力が必要だと述べている。

このように、よそ者が地域づくり現場で重視されるようになったのは、よそ者が地域にとって役に立つからである。つまり、よそ者が地域とかわることで地域づくりが促進されたり、地域にないものを提供してくれたりするので、よそ者が注目されることになる。地域づくりを支援するという点で、よそ者は地域にとって期待される存在である。

実際、よそ者を「活用」している地域づくりの例は多く存在する。例えば田中（2002）は、京都府美山町にある芦生原生林の保全の事例を取り上げ、原生林の価値を生かすためには、ネットワークやそこで出会う「異質な他者」の存在が重要であると述べている。田中の分析によれば、この異質な他者とは芦生の京都大学演習林の教職員やダム反対にかかわる人たちである。また松村（2001）は南会津の開発ではよそ者をうまく取り込んで定住させ、そこに研究者がかかわって環境保全を進めていると主張している¹⁴。

そこで、よそ者が持つこうした効果を整理した。この点については、敷田（2005c）がまとめているが、その中では「意図せずとも起こる効果」をよそ者効果としている。しかし本稿では、意図的に起こることも含めて、よそ者の地域づくりへのかかわりが起こす変化をよそ者効果とした。

▶14 ただし、その根拠やメカニズムは、松村の論文の中では必ずしも明確に示されていない。

3-2 よそ者効果の検討

よそ者効果の第1は、よそ者が持つ「地域の再発見効果」である。地域アクターは地域の日常の中で生活しているので、地域資源の価値や地域のすばらしさに慣れきっていて気づかないことが多い。しかしよそ者は地域に不慣れなことが幸いして、逆にそれを見出すことができる。日常性に埋没した「当たり前」のことを再考し、再発見する機会をよそ者がつくり出している。よそ者の「まなざし」として語られることが多いのがこの他者の視点である。

異なる視点で評価することは、地域を訪れた特定の観光客によっても起こる。例えばエコツアーに参加したエコツーリスト¹⁵が、地域の自然環境を高く評価することがある。それを聞いた地域住民が改めて地域資源の価値に気がつき、「多くの人が賞賛するのだから良いものなのだ」と意識するようになることはこの例であろう。また、地域資源の再発見や評価方法である「地元学」を、水俣市で提唱してきた吉本（1995）は、地域をよそ者の目で見てもらい再評価することを、地元学の重要な要素だとしている。このような地域資源の再発見が起きるのは、よそ者が持つ「違和感」に起因すると考えられる。

これに関連して、人の脳が日常生活で予想できることと、予想できないことの差に違和感を持つことから思考するという「予想脳」の考え方が脳科学で議論されている（藤井、2005；瀬名ほか、2006）。また茂木（2003）

▶15 エコツーリストは、一般の観光客とは違い、地域に比較的長く滞在し、地域とかわる機会も多いので、本稿ではよそ者と考えている。

も、他者の存在が創造活動には必要だと述べ、ダーウィンにおけるウォーレスやアインシュタインの妻ミレーヴァを例にあげている。このように違和感を感じることによって脳が刺激を受け、新たな発想や展開につながることは、地域資源の再発見や再評価でも起きると考えられる。そして違和感が大きいよそ者が、地域資源や地域の良さを「再発見」する可能性が高い。

第2に、よそ者による「誇りの涵養効果」がある。よそ者の視点に注目した菊地（1999a）は、よそ者の持つ外部の視点は、「自意識を高めるための媒体」と述べている。自意識はある意味で「誇り」にもなるが、その形成には他者による評価や褒めが必要である。そのためには、地域アクターとは異なる価値を認識できる他者が必要である。地域づくりの中でその役割を果たすのがよそ者であり、地域アクターは、地域外の視点を持つよそ者を意識することで、自らの地域のすばらしさを認識する。

例えば、地域を訪問した観光客の評価によって、今までは都市の洗練されたデザインが良いと思っていた地域アクターが、地域に古くからある工芸や芸術の評価がもっと高い筈だと気づくことである。これは頻りに観光客が訪れるだけでも効果があるが、よそ者と地域アクターが深くかわることでより促進される。ふだん接することがない地域の事象によそ者が接し、その価値を評価するには時間が必要だからである。第1の再発見効果とは異なり、よそ者が地域のアクターと十分コミュニケーションして、優れているという評価を伝えるには時間がかかる。その点では、短時間しか滞在しないマスツアー型の観光客では難しく、より滞在時間が長い、エコツーリストなどのように、地域に一定時間滞在する観光客の方が効果発現の機会が多いだろう。

この場合、特に受け入れる地域がよそ者に対して寛容であるかが問われる。よそ者との違いだけに注目し、よそ者の振る舞いを規制すれば、よそ者は地域外に逃避する。鹿島（2008）は多文化共生するフランスのパリを例にあげて、パリはよそ者に何の影響も与えず、また与えられることもない、よそ者がよそ者であることを許容する場だと考察している。このような自由な表現や発言の機会があつてこそ、よそ者の役割が果たせると思われる。

第3に、よそ者が地域にない知識や技能を持ち込む、「知識移転効果」があげられる。地域づくりを進める際に、地域側に地域づくりにかんする知識が不足することは多い。そこで、よそ者が地域アクターと接する際に、その不足を補う効果が期待できる。ほんらい地域は、地域づくりに必要な知識を自ら調達していたが¹⁶、最近はそのが十分にできなくなっている。

その理由はまず、地域づくりに必要な知識の変容である。以前であれば、地域づくりに必要な知識はある程度地域で学習できる内容であった。また地域アクターもその学習能力を備えていた。しかし、最近の「観光まちづくり」のように、都市部のマーケットにかんする情報や知識が集客のために必要な場合では、以前のように地域だけで十分な知識を準備することは難しくなっている。

これは、地域が最新の知識を得る機会が少ないか、学習するための施設

▶16 地域を擬人化すれば、これを「学習」ということができる。それは地域社会の人びとが何らかの知識を得て、その行動を変化させるプロセスである。

や設備などが地域に不足することが招く結果でもあるが、そもそも以前は必要としなかった最先端の知識まで、地域づくりに必要になったことを指摘しておきたい。例えば、インターネットやホームページにかんする知識は、以前は必要なかったが、現在の地域づくりでは広報や地域外の情報収集、地域外とのネットワークづくりなどのために、どうしても必要とされる知識である。

また以前から地域アクターが持っている地域づくりにかんしての知識も、維持や伝承の危機にある。こうした「土着の知」¹⁷の喪失は深刻である。その理由は、地域の自然環境を管理するには、深い知識と経験が必要であり、各地の自然環境はこうしたかかわりの中で維持されてきたからである(井上 2004)。しかし高齢化や農林業の衰退などによって、地元住民による自然環境への関与が減少した結果、地域における環境管理能力やその基盤となる生態系にかんする知識が消失し、管理能力も低下した。例えば山形県庄内海岸では、生活形態の変化などで地元住民のクロマツ林へかかわりが減り、クロマツ林の管理ができなくなった(敷田 2005a)。また大規模な公共事業などによって、結(ゆい)や寄合といった地域社会が今まで持っていた合議システムや地域の「共同管理システム」が破壊されてきたことも原因であろう(桑子 2005)。

以上のような、地域に不足しがちな知識を持ち込む例として、菊地(1999b)が、高知県黒潮町(報告当時は「大方町」)の砂浜美術館を調査し、そこでは外部アクターから知識・情報・技術を導入していると分析した。そして、そのための「メディア」として黒潮町にある砂浜美術館が機能していると主張している。また地域づくりではないが、途上国支援でも、よそ者である援助者が途上国の地域とかかわり、その際に地元が持たない知識や技術を用いて支援する事例を井上(2004)が報告している¹⁸。

第4に、地域の変容を促進する効果がある。よそ者の持つ異質性は、地域側に「驚き」や「気づき」をもたらし、そこから地域が変容する。それはもともと地域が持っている資源や知識を、よそ者の刺激を利用して変化させることでもある。例えば「よそ者の声を借りて」とか、「旅の人が風を吹かす」という言説はこれにあたる。第2次世界大戦後の愛媛県での生活改善運動を調査した小國(2004)は、農村の女性たちがよそ者である改良普及員とかかわることで啓発され、地域内での発言力が増すなど、「エンパワメント」したことを報告している。

第5に、よそ者が持つ「地域とのしがらみのない立場からの解決案」の提案があげられる。中世の僧など、権力から離れた者によって和睦などが成立することがあったという研究例を今井・金子(2000)が指摘しているが、地域のしがらみに捕らわれない立場だからこそ、よそ者は優れた解決策を提案できる。地域の事例ではないが、企業組織と企業文化について分析した佐藤・山田(2004)は、組織文化に一定の距離を置くメンバーが「変革」の担い手となると述べている。組織と同化していない存在こそが組織を変革できるということは、地域づくりで考えれば、行政や地域政治と距離を置く(置かざるを得ない)よそ者が地域を変容させるよそ者効果である。

▶17 地域で受け継がれてきたこうした伝統的な知識は「ローカルノレッジ(藤垣 2003)」やTEK(Traditional Ecological Knowledge、秋道(2002)など参照)などと呼ばれる。

▶18 ただし、折井・上野(1987)は、よそ者の効果を評価しつつ、外部アクターが内部に影響を与える、またはアイデアそのものが外部にあると分析する研究が多いことを指摘し、むしろ内部から起こる革新の重要性を強調している。

以上のように、本稿ではよそ者効果を①技術や知識の地域への移入、②地域の持つ創造性の惹起や励起、③地域の持つ知識の表出支援、④地域（や組織）の変容の促進、⑤しがらみのない立場からの問題解決だと整理した。ここでは、それぞれの効果を独立した事象として整理したが、実際の地域づくりでは、このような効果が複合的に同時に起きていると考えられる。それを分離して論ずることは地域づくりの当事者たちにとってはあまり意味がなく、むしろよそ者の持つ効果がどのように発現するかを考察のポイントを置くべきであろう。

3-3 よそ者効果の活用

前節で述べてきたように、地域づくりではよそ者効果を期待することができ、そのためによそ者が地域に来ることを歓迎することが多い。それは、地域アクターたちの、優れた者であれば受け入れることは厭わないと考える「現実的な考え方」に依拠する。しかしその一方で、地域のことは地域で解決し、よそ者の介入は不必要とする「地域の自給自足主義」も地域によっては存在する¹⁹。

しかしここで重要なことは、（結果としての）よそ者効果の学術的分析ではなく、それを前提にしたうえで、よそ者と地域がどのような関係を持ち、これから地域がどのようによそ者を活用できるかという将来的、積極的な視点であろう。特に最近の地域では、地域づくりを進めようにも地域に十分な人材がないという悩みもあり、地域内の住民の主体的参加とよそ者の活用が重要課題になってきている。途上国の環境保全や資源管理を研究対象とした佐藤（2002）も、「外部アクター（よそ者）」が参加する地域資源の保全活動が1990年代以降注目されてきていると報告している。国内外を問わず、十分な資源活用戦略を持ってない地域の場合、こうした「よそ者活用戦略」は重要である。

この視点の延長上に「よそ者資源論」がある。佐藤（2008）は、アジアの津波被災地で、英語ができるリーダーがいた村落が援助を多く獲得した例を紹介し、外部とのネットワークも「資源」だとしている²⁰。この考え方は、よそ者も地域にとっては活用可能な資源であり、よそ者は「有効に使うもの」という現実的な意味が込められている。そのため、働きかけの度合いによっては資源として使われないよそ者も存在するし、同じよそ者が、ある場合には資源となったり、ならなかったりすることになる。

また地域づくりを進めようにも、地域に十分な人材がない地域側の事情を反映して、地域づくりに専門家が関与することが増えている（敷田・森重、2006）。そうなると、地域側がよそ者に過度に期待したり依存したりすることも多くなる。その背景には、よそ者は優れているから活用すべきだという「純朴な見方」があると考えられる²¹。そこに問題はないのだろうか。

野田（2000）はこの点にかんして、よそ者を「資源」と見て、途上国の地域側はそれを有効に使う必要があると主張する。この場合には、「持たない」地域側が「持てる」地域、つまり（一般的には先進国から）来るよそ

▶19 よそ者を歓迎するケースとしては、地域情報化の問題で地域が独自にコンテンツを創出することを調査した丸太（2004）の例をあげることができる。また、その逆のケースは、前述した菊地（1999b）が分析した高知県の砂浜美術館の例や鬼頭（2000）による鹿児島県奄美大島でのよそ者が学びを誘導するプロセスの例をあげることができる。

▶20 ただし、ここでの資源の意味は「働きかけの対象となる可能性の束」（佐藤、2008）である。また、よそ者は内部アクターが「働きかけて資源化される対象」である（秋道、2007）。

▶21 このような主張の例としては、例えば世古（2001）がある。世古は、地域外の住民である「よそ者のパワーを利用すべきだ」と主張しているが、この視点には「使用上の注意」は含まれていない。

者から資金や資源を引き出そうとする、生き残るための戦略的駆け引きとして、むしろに評価することができるだろう。つまり野田の場合には、途上国住民が「ドナー」と呼ばれる援助側や開発ワーカーから、いかに有効な支援²²を引き出すかという視点であり、単純によそ者は良いものだから活用しようという主張ではない。

3-4 よそ者の限界と課題

よそ者効果を活用して地域づくりが進められ、それが効果的なことも多い。よそ者と町の職員が協働して風力発電に成功した山形県立川町の事例などの「成功例」も多く報告されている（飯田ほか、2003など多数）。そのため、よそ者に対する「好意的な評価」が生まれるが、よそ者が単純に地域に利益をもたらすという素朴な期待は誤りである。例えば、地域づくりで、自治体の長や地域づくり関係者が、地域外から専門家などを呼んでくることは多い。それが、有用であることは多いが、一方で弊害もあることは、各地の地域づくりで語られている。ほんらい活用できる優れた資源であるよそ者が、有効に活用されないのはどうしてなのだろうか。

その理由としてまず、来訪したよそ者が自らリスクを負うことは少ないことを指摘できる。よそ者はあくまで「有限責任」を持つ存在なので、一般的には第三者的なアドバイスに陥りがちである。そのアドバイスが、地域の実情を認識した適切な内容であるか保証はできない²³。さらに専門家としてのよそ者が来訪する場合には、「権威」を伴うことも多く²⁴、地域側がそれに盲目的に追従することも起きやすい。無責任なアドバイスと追従の結果、極端な場合には、地域に損失や将来的負担を持ち込むだけの「変革」に終わる²⁵。

そのため、よそ者による地域の主体性を無視した一方的な変革は、たとえ従来の「外来型開発」に対するアンチテーゼであっても否定されなければならない。規模や設定は異なっても、地域外アクターによって一方的に変革が進む点では従来の外来型開発とパターンが同じだからである。よそ者が地域住民を何らかの活動のためにファシリテートし、参加させることが常に正しいと考える研究や地域づくりは批判されるべきである（菊地、2002）。

このような懸念はあるが、よそ者と地域の相互関係がうまく運営された事例もある。その相互関係の形成プロセスこそ、地域づくりでは重要であろう。その優れた事例として京都府京丹後市の海岸保全活動をあげることができる。同市にある琴引浜では地域外のよそ者と地域内部にいるよそ者が協働して「鳴り砂の浜（琴引浜）」を保全している（敷田、2002）。

適切なアドバイスが必要だと前述したが、実際には地域づくりには「最適解」はない。地域の置かれた環境や社会的状況は多様で、正解が多数存在するのが現実である。そこで、地域づくりを最適解の選択の問題と捉えるのではなく、松村（2004）が述べるように、地域の「選択肢を豊潤化しておく」こと、つまり選択を強いられる前に選択肢を十分に用意しておくことの方が重要である。

▶22 この場合の支援とは、今田（2000）が主張する「支援」であり、「他者の行為の意図を理解しつつ行為の質を向上させ、最終的には他者のエンパワメントをめざす」ことである。

▶23 これについては、笠羽（2004）が述べるように、よそ者による地域の現状評価が一方的であることも多い。またよそ者が持つ知識の押し売りになりがちで、地域住民が持つ地域の知が軽視されることも多い。その結果、誤った選択がされる可能性は高い。

▶24 杉万（2006）が述べるように、よそ者が地域に入る場合に「贈与と略奪」が起きれば、地域がよそ者の持ち込む新たな「ルール」に従うことになる。よそ者が専門家の場合、この現象が起きやすいと考えられる。

▶25 ただし、逆に、地域に対する責任をよそ者が過度に意識すれば、よそ者効果の発現には制約がかかることも指摘しておきたい。

この時には、地域づくりにおける適切な選択のアドバイスではなく、選択肢を増やすことによそ者が貢献する必要がある。途上国援助の専門家の立場にかんする分析で同様な指摘がされている。野田（2000）は途上国の開発支援で、ひとつのやり方が正しいと思ひこむことでオプションを無視してしまうリスクを問題にしている。また佐藤（2004）は、よそ者である開発援助の専門家は、自らの理想実現のために努力してはいけない、と端的に指摘した。

ただし、よそ者による選択肢の多様化支援での課題は、時間がかかることである。選択は短時間でできるが、選択肢を増やすことには時間がかかる。そのため必然的に、よそ者による「短期的な地域づくり」は問題があると考えられる。時間の長さに目安があるわけではないが、コンサルタントや自治体が進める1年間だけの補助事業や指導は、当然この短期的な関与に分類される。

しかし、よそ者に問題がある場合でも頭から否定するのではなく、よそ者を適切に地域側が活用できれば、よそ者効果を得ることができる。鶴見（1989）が主張した内発的發展論でも、外部から地域が受ける影響を全否定するのではなく、地域が地域外と関係しながら発展することを主張している。つまり、地域側で適切なよそ者を見出さなければならない。地域アクターたちが、よそ者を選んで進める地域づくりがほんらいの姿ではなからうか。

その場合のポイントは、地域の主体性と多数のよそ者から適切なよそ者を見出す戦略である。よそ者が支援する地域を選択することが多いが、それを地域側がよそ者を主体的に選択することである。同様な主張としては、よそ者が地域の人びとを何らかの活動に参加させると考える前に、よそ者が地域にいかにして参加するかを考えることが必要であるとした、佐藤（2003）をあげることができる。

以上のように、よそ者を短期間呼び、彼らの提示する「最適解」に従って地域づくりを図る手法には問題や限界があることが指摘できる。しかし、依然として現実の地域づくりでの「よそ者礼賛」は多く、地域の主体性がないままによそ者に依存することが起きている。そのため、地域が主体的によそ者を選択し、よそ者を活用するためのモデルや手法が示されなければならない。つまり、よそ者依存モデルに代わる、「よそ者活用モデル」の提示が必要である²⁶。

▶26 そのようなモデルのひとつとして、敷田らが示している「サーキットモデル」があげられる。サーキットモデルとは、オープンソース型の知識創造プロセスを描いたモデルであり、敷田らによって、地域づくりやNPO活動などを進める際に有効なことが報告されている。詳細は、敷田・森重、2003；敷田・末永、2003；敷田、2005bなどを参照のこと。

4 よそ者と地域にかんする考察

4-1 アイロニカルな存在としてのよそ者

前節までで、よそ者の持つ効果やその活用の方法の重要性や課題を述べてきた。よそ者は一般的には地域に利益をもたらす存在だが、よそ者によ

って地域づくりに問題が生ずることも多い。では、なぜ地域づくりでよそ者の存在が繰り返し注目されるのだろうか。よそ者がまったく「余計な者」であれば、むしろイレギュラーな存在として批判されるはずである。また、必要とされないのであれば、そもそも認識されない存在だと考えられる。

そこに「アイロニカルな存在」としてのよそ者がある。よそ者はシステムにとってほんらい必要なはずなのだが、地域というシステムはいったんそれを否定したうえでよそ者を必要とする。一度境界を引いたうえで、地域がよそ者を上手に招き入れていると考えることもできる。赤坂（1992；1995）が論じているように、以前の地域共同体では、こうした戦略的なよそ者活用が行われていたのではないか。おそらくそれは、ハーバーマス（2004）の示す「差違に敏感な包括」である。

しかし、よそ者は越境する者であり、地域の常識を否定する存在でもある。このような危ない存在は地域側の「技量」がなければコントロールできない存在であった。逆にその能力がある地域が、よそ者を活用できたのではないか。それを正確に表現すれば、よそ者の活用は地域側の能力だけで一方的に決まるのではなく、地域とよそ者の間のある種の「力関係」で決まると考えられる。この力関係のバランスがある程度とれていれば、地域にとってもよそ者にとっても満足できる地域づくりが実現するのではないか。

ところが、このバランスは前述したように地域外の知の優位性や専門家であるよそ者の権威などによって、よそ者に有利に働く傾向がある。また地域側も土着の知、ローカルノレッジを失い、対抗できなくなっている。地域社会が過疎化や高齢化で脆弱になった現在は特に、地域側にとってよそ者と対等に交渉できる余地がなくなっただけではなからうか。しかし、対等によそ者と交渉し、活用するたくましさを地域が失った現在も、地域はよそ者を必要としている。また必要としなくても地域外からのよそ者²⁷の来訪は絶えることはない。

4-2 異質な他者としてのよそ者

問題点が指摘されながら、地域がよそ者に期待することは、1960年以降の地域の同質化とも関係がある。現在の地域は、就職や都市部への進学によって、地域内の「異質な他者」の予備軍である若者を都市に提供してしまい²⁸、結果的に同質化が進んだ。また以前の地域であれば、よそ者をよそ者として認識しながら、よそ者とコミュニケーションできていた。しかし、観光客などの来訪者の増加や、急激な転出・転入という社会の流動性の高まりがこうした機会を奪い、よそ者との豊かな関係は減少した。こうしたことが背景にあり、逆に地域がよそ者を積極的に求めるようになっているのではないか。

しかし、よそ者の「消化能力」を失った現在の地域で必要とされているよそ者は、他者でありながら他者ではない、「よそ者性を除いたよそ者」であろう。このような性質を持つよそ者（他者）にかんして大澤（2008）も、一般に言われる「オタク」たちが望む、人畜無害なよそ者の存在を示

▶27 この場合のよそ者には、前述した赤坂（1992）による「広義で解釈した分類」のよそ者も含められている。

▶28 このように「若者」を異質な他者としてしまうことに異論はあるかもしれないが、「よそ者・若者・ばか者」という地域で使われる常套句は、若者に今までの常識を超える変化を起こすという、よそ者との共通性を求めている。この点で、若者はよそ者性を期待されていると考えることができる。

峻した。大澤は、オタクも実は他者の存在を必要としているが、他者が自分に危害を加えることは避けたいので、結果的に他者性を殺した「同質な」オタク同士で集まるのだと述べている。現在の地域も、このようなよそ者を求めているのではないか。

そこで求められるのは「毒がないよそ者」であり、「安全なよそ者」という設定である。そのため、偶然に地域と接触する、ある意味で危険なよそ者ではなく、安心して接触できる人畜無害なよそ者を必要とする。最近の地域づくりでも、このような（一見）人畜無害なよそ者で推進されることは多いだろう。例としては、行政が積極的に関与し、人畜無害な専門家としてのよそ者を用意する地域づくりである。その背景には、地域づくりにおける短期的な効率や効果を優先するために、別な意味でリスクを下げたよそ者の活用要求がある。

このことは生物の「免疫系」に例えて考えるとわかりやすい。水野(2005)によれば、人を含む生物はウイルスや細菌など、自分の身体にとっての異物（よそ者）を利用して自らの免疫系を形づくってきた。しかし、現在は逆に、感染症対策などのために、殺菌などで異物を取り入れる機会を減らし、人は限りなく無菌にされた状態を好む。この状況で生物として取り入れられるのは、滅菌や殺菌した食品のような「安全な異物」しかない。つまり、地域でいえばよそ者性を除いたよそ者であるが、免疫系がよそ者である異物で形成されることを考えれば、こうした人工的な防御による生体の維持が持続可能であるという保証はないだろう。

ところで、よそ者は地域外から来ることも多いが、前述した「越境」の視点で考えれば、むしろ地域の内外を問わず「異質な他者の視点」を持てる存在だと捉え直すことができる。菊地(1999b)も、地域住民は地元で、よそ者は地域外から来る人びとという設定に疑問を呈し、地元の住民がよそ者と同じ視点を持つことができると述べている。京都府京丹後市では、地域外のよそ者と地域内部にいるよそ者が協働して「鳴り砂の浜(琴引浜)」を保全している(敷田、2002)。そこでは、地域をいったん出ることによって外部者の視点を持った住民や、地域内にいながら外部者との接触で「異質な他者の視点」を持つに至った地域アクターが「地域内よそ者」として、地域外から来たよそ者と協働している。

この地域内よそ者とは、地域にいながら他者の視点を持てる、ある意味で地域内にいながら「越境」した存在でもある。彼らは、何らかの学習や経験を通して、地域のしがらみや常識を乗り越えてゆく。この内なる境界を越えることこそ、ほんらいの越境ではなかろうか。外に出ることで成り立つ越境は、ある意味で既存の基準や常識からの逃避にもなる。地域内よそ者とは、こうした困難なプロセスを超えた者で、それは地域外よそ者よりも貴重な存在である。

最後に、地域におけるよそ者の活躍の場について触れておきたい。よそ者の持つよそ者性は、地域によそ者が入った時から変容を余儀なくされる。地域の日常の持つ圧力やルールは強力だからだ。その結果、せつかくの異質性が失われ、よそ者効果を発揮できないことも多い。このような場合の

対策として、地域の中の「非日常空間」の活用がある。非日常空間とは、日常生活ではないことが行われる空間であり、通常は日常生活空間から地理的に離脱する、つまり旅などで実現できる。

しかし、非日常空間は地域内にも存在する。その例として、観光で活用される宿泊施設、宿をあげることができる。宿は地域の中にありながら、「旅の者」を泊める場所であり、ある意味で羽目を外せる非日常的空間でもある。このような場所は地域内にありながら異質の場で、よそ者がのびのびと表明できたり、それを地域側が受け止めたりできる異空間となる。網野（1996）は、中世の「無縁」たちが集まる場所として「宿」の存在をあげ、ある種の「アジュール」だと述べている。また中沢（1994）はそれを「市」だと述べている。そこには異質性という共通の要素があり、地域内にこのような「地域外の場」を用意することもまた、よそ者効果を生かすひとつの工夫だと考えられる。こうした地域外の場は、宿以外にも地域内に存在する。それは地域内のNPOの事務所や活動拠点などであり、同じ場として捉えることができよう。

5 変容するよそ者性

これまで述べてきたように、よそ者のよそ者性が変化することは想像に難くない。よそ者性は、遺伝形質のようによそ者に備わった特性ではなく、よそ者が他者との関係の中で持つ（持たされる）特性に近い。つまり、よそ者性は、よそ者とそれを受け入れる地域との関係で決まる。そして、よそ者が同一の組織や地域に所属し続けることでよそ者性は変化する。またその関係は相互関係であり、よそ者と地域双方によって「操作する」ことも可能だと考えることもできる。

例えば、地域外から移住してきたよそ者があえて地域と同化することを拒み、よそ者として地域の生活や活動から距離をとって暮らし続けることで、よそ者であり続けることは可能である。逆に、地域住民と同じように振る舞えば、よそ者が地域と同化する、つまりよそ者ではなく、内なる人になることも可能であろう。そしてこの関係は双方が恣意的に操作することが可能であるという前提に立てば、それぞれにとってそれを有利に位置づける「戦略」をとりえる。

このように、よそ者性が変化するという前提に立つと分析できることは多い。中でもそれが際立つのが、観光²⁹や交流分野である。その理由は、観光や交流が一時的かつダイナミックな、移動を伴う活動であるからだ。確かに本稿で分析してきたよそ者性の高いよそ者に限定すれば、観光や交流に限って議論することに限界もある。しかし、その軽さゆえに、逆にさまざまな分析視点を提供してくれるのではないかと考え、本稿ではそれを考察した。

▶29 観光はさまざまに定義されてきた。一般的には、世界観光機関（World Tourism Organization：WTO）による定義によれば「the activities of persons travelling to and staying in places outside their usual environment for not more than one consecutive year for leisure, business and other purposes.」である。しかし、ここでは、「個人やグループで自主的に地域外へ旅行すること」と広く捉える。そして本稿の趣旨に沿えば、「外部者（訪問者）が一時的に地域を訪れて地域関係者や住民と交流すること」である。

5-1 ニセコ地域のロス＝フィンドレー氏とよそ者性

ここでは変容するよそ者性に注目し、北海道のニセコ地域（正確には倶知安町中心の広域エリア）でのアウトドア観光による開発の例をあげる。

良質な雪の魅力をもとに海外からの観光客を年間18万3000人（2007年）も集めるニセコ地域は、停滞した観光地域からの再生や地域資源を活用した観光開発の成功例として最近高く評価されている。もちろん、急激な開発の影響が懸念されることから、批判的な意見も認められるが、それを認める論調が多いことも確かである。また批判の中に含まれる「日本人ではない」人びとが主導した「成功」に対する反発を差し引けば、開発は評価されていると考えて良いだろう。

この開発とその後の発展のシンボリックな存在がロス＝フィンドレー氏（以下「フィンドレー氏」）である。オーストラリア人である彼は、1989年に来日し、アウトドア事業を営んできた。海外から来たよそ者が地域で成功を収めた例である。彼はニセコ地域では明らかに「よそ者」である。ニセコ地域にとって、日本人ではないフィンドレー氏は、上記のような「批判」を免れることはできないが、それも国土交通省による「観光カリスマ」の選定などで、社会的評価を得ている。またフィンドレー氏が各地で講演したり、北海道庁の北海道観光審議会などの公的な委員会の委員を務めたりすることでも、それは解決されてきた。

開発の成功とは別にフィンドレー氏は、持続可能な観光や都市計画による、節度ある地域開発を主張している。それは自身がアウトドア観光を営み、フィールドとする自然環境の質が低下することへの懸念からだと考えられる。また現在受け入れられつつある「持続可能な社会」という視点に立つ主張でもある。しかし、この主張をニセコ地域で日本人が行うとどうだろうか。おそらくその場合に受ける批判は、先のフィンドレー氏が受けるそれより一段と厳しいだろう。

フィンドレー氏は日本人を配偶者に持ち、ニセコ地域で暮らしているが、明らかに容姿は日本人ではない。自然環境保全についての主張は、自身やその同業者が行うアウトドア事業やニセコ地域の「開発」の現状を見る限り、完全に一致しているとはいえない。しかし、明らかによそ者のフィンドレー氏が「正当な主張」をする背景には、地域側によそ者だからという「寛容な納得」が周囲に生じている可能性がある。

ニセコ地域におけるアウトドア事業をリードしたと認識されながら、地域に定住し、前述した環境保全にかんする正当な主張を両立することができるのは、明らかによそ者であるという主張を「容姿」で示しているからではないか。よそ者性の低い日本人が環境保全を主張をしても、本人が開発にかかわっていれば、たちまち批判の対象となる。また地域に居住していれば、成功している開発に反対することは難しい。しかし、フィンドレー氏の場合には、明らかに「日本人ではない」という容姿、よそ者であるという「メッセージ」によって、環境保全の主張と、アウトドア事業という「開発」への関与の矛盾が、受容されているのではないか。

そこで注目すべきことは、地域で起きる現象を分析する際に、地域社会

やコミュニティそのものを分析することも重要だが、むしろよそ者という存在を利用すれば解明できることが多いという点である。

5-2 観光・交流とよそ者性

フィンドレー氏が関与する観光・交流分野は、ある意味でよそ者性を低くしたよそ者を地域に招き入れる活動である。前述した赤坂（1992）のように観光客をよそ者に分類する主張もあるが、特にマストツアーで来訪する観光客は、添乗員に管理され自律性が低く、地域との接触も少ないので、よそ者とは認識しにくい。つまりよそ者であっても、よそ者性が低い存在であった。

しかし最近では、エコツーリズムなどのニューツーリズムが拡大し、また政策的にも注目されている。それは「観光の多様化」だとして肯定的に捉えられることが多い。ニューツーリズムでは地域との関係が見直され、比較的長時間地域に滞在する観光も提唱されている。この点では、マストツアーの観光客がよそ者性が低く、地域にとってよそ者効果を活用できないという問題点も解消できるように思える。

しかしこのような観光は、小グループや特定の興味を持つグループによるSIT（Special Interest Tour）であり、そこに参加する観光客は趣味や嗜好が同じであるなど、「同質」である可能性が高い。これはある意味では、観光の「たこつぼ化」である。もちろんこうしたニューツーリズムと同じ性質を持つ観光は以前から存在したが、多様な観光が選択できる現代にあって、逆に観光客の多様性が低い観光（正確にはツアーや観光行動）が生み出されていると考えることもできる。

そして個別のツアーの同質化が進みながら、それが観光全体に「流行」する現象は、熱狂や流行現象についての研究で説明することができる。中居（2008）によれば、最近の流行は小さなコミュニティで起き、それが社会全体に一気に伝搬する。インターネット上のソーシャルネットワークサービスなどの小集団から流行が突如始まることを考えればわかりやすい。これを根拠として、同質な集団によるSITが全体としては流行現象になることの説明は可能であろう。

小さな集団での同質性への回帰は、観光のグローバル化が進み、世界各地への移動や異文化との出会いが進行する一方で、観光に居心地の良さや自己回帰が求められた結果だとも考えられる。それは鈴木（2007）が指摘する、グローバル化の進行と並行した「ジモト」的なもの、つまりローカルなもの追求と同じ現象である。自己や小集団に回帰することが安心となる。

6 結 論

本稿では、地域づくりでその役割が注目されているよそ者について、先

行研究からよそ者の定義や特性を明らかにしたうえで、よそ者と地域の関係を考察した。そしてよそ者が持つ役割や効果を積極的に評価したうえで、よそ者がもたらすよそ者効果に言及し、技術や技能などの知識を地域へ移入、創造性の励起や地域の持つ知識の表出支援、地域の変容の促進、そしてしがらみから離脱した問題解決などをあげた。

また本稿では、一方が他方に影響するだけではない、相互変容を基調としたよそ者と地域の関係を考察した。そして、地域づくりの場で一般に言われる「よそ者期待論」でもなく、逆に地域が外部から独立した地域自立でもない、地域がよそ者を「うまく使うモデル」を示唆した。しかしこうした「よそ者使い」は地域で簡単にできることではない。ともすればよそ者の持つ異質性を過度に取り入れ、自らのアイデンティティを失う。しかし、ほんらいのよそ者効果とは、彼らの持つ力を利用して地域が変容することである。そのためには外部の文化を受容し、「再編集」しなければならない。それが可能な膂力を持った地域は、よそ者の持ち込む知識や技能が地域を変容させたように彼らには見せながら、実際にはそうした知識や技術を新たな文化に昇華させる。その「相互変容」のプロセスこそが地域づくりである。

以上のように本稿では、よそ者の存在や特性を踏まえたうえで、地域づくりとよそ者の役割に言及した。そして、地域がよそ者とのような関係を持つかが重要であることを指摘した。さらに、効果的な地域づくりとは、多様なよそ者を受容し活用する地域の戦略であることを述べた。そのためには、よそ者と協働しながら地域もよそ者も相互変容することであり、それが結果的に地域を持続可能にすることにつながるのではないだろうか。

参考文献

- 赤坂憲雄 (1992) 『異人論序説』 筑摩書房, 335p.
- 赤坂憲雄 (1995) 『排除の現象学』 筑摩書房, 323p.
- 赤坂憲雄 (2002) 『境界の発生』 講談社, 329p.
- 秋道智彌 (2002) 「序・紛争の海」 秋道智彌・岸上伸啓編, 『紛争の海—水産資源管理の人類学—』 人文書院, pp.9-38.
- 秋道智彌 (2007) 「資源・生業複合・コモンズ」 秋道智彌編, 『資源とコモンズ』 弘文堂, pp.13-36.
- 網野善彦 (1996) 『増補 無縁・公界・楽』 平凡社, 382p.
- ベッカー＝S＝ハワード (1993) 『アウトサイダーズ ラベリング理論とはなにか (新装)』 新泉社, 289p.
- 遠藤泰生ほか (2002) 遠藤 泰生・ 木村 秀雄編, 『クレオールのかたち—カリブ地域文化研究』 東京大学出版会, 316p.
- 林香里 (2005) 『「冬ソナ」にハマった私たち—純愛、涙、マスコミ…そして韓国』 文藝春秋, 217p.
- 藤垣裕子 (2003) 『専門知と公共性—科学技術社会論の構築へ向けて』 東京大学出版会, 224p.
- 藤井直敬 (2005) 『予想脳』 岩波書店, 118p.
- ハーバーマス＝ユルゲン (2004) 『他者の受容 多文化社会の政治理論に関する研究』 法政大学出版局, 403p.

- 平川秀幸 (1999) 「リスク社会における科学と政治の条件」『科学』 pp.211-218.
- ハイド＝ルイス (2005) 『トリックスターの系譜』法政大学出版局, 611p.
- 飯田哲也以下4名 (2003) 「座談会 環境NGOと政策形成—環境運動の新しい動向」『環境と公害』 pp.37-44.
- 伊集院守直以下7名 (2006) 神野直彦・井手英策編, 『希望の構想 分権・社会保障・財政改革のトータルプラン』岩波書店, 257p.
- 今田高俊 (2000) 支援基礎研究会編, 『支援学—管理社会をこえて』東方出版, 242p.
- 今田高俊 (2005) 『自己組織性と社会』東京大学出版会, 298p.
- 今井賢一・金子郁容 (2000) 『ネットワーク組織論』岩波書店, 272p.
- 井上真 (2004) 『コモンズの思想を求めて—カリマンタンの森で考える 新世界事情』岩波書店, 162p.
- 金子勝以下6名 (2008) 金子勝・高端正幸編, 『地域切り捨て 生きていけない現実』岩波書店, 205p.
- 笠羽晴夫 (2004) 『デジタルアーカイブの構築と運用 ミュージアムから地域振興へ』水曜社, 191p.
- 鹿島茂 (2008) 『パリの異邦人』中央公論新社, 171p.
- ケレーニイ＝K (1974) 「第四部 神話的あとがき」『トリックスター』晶文社, 309p.
- 菊地直樹 (1999a) 「「地域づくり」の装置としてのエコ・ツーリズム—高知県大方町砂浜美術館の実践から—」『観光研究』 pp.19-28.
- 菊地直樹 (1999b) 「エコ・ツーリズムの分析視覚に向けて—エコ・ツーリズムにおける「地域住民」と「自然」の検討を通して—」『環境社会学学会『環境社会学研究』 pp.136-151.
- 菊地直樹 (2002) 「エコミュージアム研究に向けた若干の視点」『エコミュージアム研究』 pp.87-92.
- 金泰明 (2008) 『欲望としての他者救済』日本放送出版協会, 254p.
- 鬼頭秀一 (1996) 『自然保護を問い直す: 環境倫理とネットワーク』筑摩書房, 254p.
- 鬼頭秀一 (2000) 「人間存在と環境の「豊かさ」と地域性—広い意味での「社会教育」の可能性に向けて—」『月刊社会教育』 pp.7-15.
- 小松和彦 (1995) 『異人論 民族社会の心性』筑摩書房, 285p.
- 桑子敏雄 (2005) 『風景のなかの環境哲学』東京大学出版会, 251p.
- 丸田一 (2004) 『地域情報化の最前線 自前主義のすすめ』岩波書店, 229p.
- 増田萬孝 (1999) 「農村の免疫力と自己再生の条件」『農業および園芸』 pp.1049-1055.
- 松村和則 (2001) 「第9章 レジャー開発と地域再生への模索」鳥越皓之編, 『自然環境と環境文化』有斐閣, pp.217-242.
- 松村正治 (2004) 「環境的正義の来歴—西表島大富地区における農地開発問題」松井健編, 『沖縄列島 シマの自然と伝統のゆくえ』東京大学出版会, pp.49-70.
- 三藤利雄 (2006) 「第10章 地域社会のイノベーション」坪郷實編, 『参加ガバナンス 社会と組織の運営革新』日本評論社, pp.213-242.
- 水野建雄 (2005) 「身体と生命世界」河上正秀編, 『他者性の時代—モダニズムの彼方へ』世界思想社, pp.195-208.
- 茂木健一郎 (2003) 『意識とは何か〈私〉を生成する脳』筑摩書房, 222p.
- 森岡清志以下7名 (2008) 森岡清志編, 『地域の社会学』有斐閣, 304p.
- 本橋哲也 (2005) 『ポストコロニアリズム』岩波書店, 232p.
- 中居豊 (2009) 『熱狂するシステム』ミネルヴァ書房, 222p.
- 中西晶 (2001) 「知のトリックスター」『知の異端と正統』新評論, pp.78-121.
- 中沢新一 (1994) 『悪党的思考』平凡社, 387p.
- 野田直人 (2000) 『開発フィールドワーカー』築地書館, 142p.
- 小國和子 (2004) 「“根っこ”のある組織化をめざして—戦後日本農村における生活改良普及員の経験に学ぶ」佐藤寛編, 『援助と住民組織化』アジア経済研究所, pp.195-226.
- 大澤真幸 (1994) 『意味と他者性』勁草書房, 369p.
- 大澤真幸 (2008) 『不可能性の時代』岩波書店, 289p.

- 大竹文雄 (2009) 「町づくりは「よそ者」に任せよ」『日本経済新聞』(2009年5月18日付け)
- 折井正明・宇野善康 (1987) 「地域内発生イノベーションの普及と促進集団—長野県南安曇野豊科町における「古民家再生イノベーション」をめぐる普及促進集団「民家を守り育てる会」に関する事例研究」『社会心理学研究』 pp.17-28.
- ラディン=P・ケレーニイ=K・ユング=C・G (1974) 『トリックスター』 晶文社, 309p.
- 佐々木信夫 (2004) 『地方は変わるか ポスト市町村合併』 筑摩書房, 254p.
- 佐藤寛 (2003) 「参加型開発の「再検討」」 佐藤寛編, 『参加型開発の再検討』 アジア経済研究所, pp.3-36.
- 佐藤寛 (2004) 「住民組織化をなぜ問題にするのか」 佐藤寛編, 『援助と住民組織化』 アジア経済研究所, pp.3-34.
- 佐藤仁 (2002) 『希少資源のポリティクス』 東京大学出版会, 254p.
- 佐藤仁 (2008) 「今、なぜ「資源分配」か」 佐藤仁編, 『資源を見る眼—現場からの分配論』 東信堂, pp.1-31.
- 佐藤郁哉・山田真茂留 (2004) 『制度と文化 組織を動かす見えない力』 日本経済新聞社, 334p.
- 関礼子 (2000) 「第6章 共生を模索する環境ボランティア—襟裳岬の自然に生きる地域住民—」 鳥越皓之編, 『環境ボランティア・NPOの社会学—シリーズ環境社会学1』 新曜社, pp.106-117.
- 世古一穂 (2001) 『協働のデザイン—パートナーシップを拓く仕組みづくり、人づくり』 学芸出版社, 223p.
- 瀬名秀明・橋本敬・梅田聡 (2006) 『境界知のダイナミズム』 岩波書店, 272p.
- 敷田麻実 (2002) 「知識創造サーキットモデルの提案—よそ者と協働する琴引浜スタイルの環境保全」『Ship and Ocean Newsletter』 pp.6-7.
- 敷田麻実 (2005a) 「オープンソースによる地域沿岸域管理の試み：山形県庄内海岸のクロマツ林保全を事例として」『日本沿岸域学会誌』 pp.67-79.
- 敷田麻実 (2005b) 「サーキットモデルによる創成教育の学習モデル」『工学教育』 pp.35-40.
- 敷田麻実 (2005c) 「よそ者と協働する地域づくりの可能性に関する研究」『えぬのくに』 pp.74-85.
- 敷田麻実・森重昌之 (2003) 「持続可能なエコツーリズムを地域で創出するためのモデルに関する研究」『観光研究』 pp.1-10.
- 敷田麻実・末永聡 (2003) 「地域の沿岸域管理を実現するためのモデルに関する研究：京都府網野町琴引浜のケーススタディからの提案」『日本沿岸域学会論文集』 pp.25-36.
- 敷田麻実・森重昌之 (2006) 「地域環境政策に専門家はどうかかわるか—地域自律型マネジメントとその実現を支援する専門家のかかわり—」『環境経済・政策研究の動向と展望』 pp.194-209.
- 篠原徹 (2003) 「総論 越境する民俗の現代的意味」 篠原徹編, 『越境』 朝倉書店, pp.1-8.
- シェレル=ルネ (1998) 『ノマドのユートピア—2002年を待ちながら』 松籟社, 214p.
- 鈴木謙介 (2002) 『暴走するインターネット ネット社会に何が起きているか』 イースト・プレス, 237p.
- 鈴木謙介 (2007) 『〈反転〉するグローバリゼーション』 NTT出版, 256p.
- 杉万俊夫以下4名 (2006) 『コミュニティのグループ・ダイナミクス (心の宇宙2)』, 京都大学学術出版会, 274p.
- 高橋康也 (2005) 『道化の文学 ルネサンスの栄光』 中央公論新社, 248p.
- 田中滋 (2002) 「5. 河川の流域、意味の流域—芦生・なめこ生産組合から美山町・グリーンツーリズムへ—」 木平勇吉編, 『流域環境の保全』 朝倉書店, pp.47-59.
- 鶴見和子 (1989) 「内発的発展論の系譜」 鶴見和子・川田侃編, 『内発的発展論』 東京大学出版会, pp.43-64.
- 内山節 (2009) 『怯えの時代』, 新潮社, 190p.
- 山口昌男 (1974) 「今日のトリックスター論」『トリックスター』 晶文社, pp.279-305.

- 山口昌男 (2000) 『独断の大学論』 ジーオー企画出版, 214p.
- 山口昌男 (2003) 今福龍太編, 『山口昌男著作集3 道化』 筑摩書房, 458p.
- 山下範久 (2008) 『現代帝国論 人類史の中のグローバリゼーション』 日本放送出版協会, 268p.
- 矢野絢也 (2002) 「田中真紀子というトリックスター」 『文芸春秋』 pp.124-129.
- 梁石日 (ヤンソギル) ・筑紫哲也 (2003) 「「身体」を喪失した日本人」 『週間金曜日』 pp.8-13.
- 吉本哲郎 (1995) 『私の地元学 水俣からの発信』 NECクリエイティブ, 206p.

(2009年5月7日受理、2009年6月12日最終原稿受理)